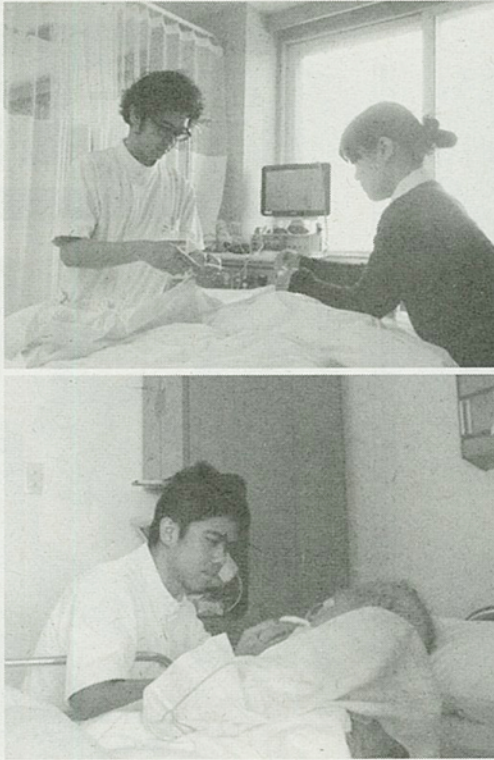


# 心臓血管センター 北海道大野

## ICU等にEPA看護師

### 言葉の壁乗り越え誕生

西区・心臓血管センター北海道大野病院(齋藤孝次理事長、大野猛三院長・157床)所属のEPA(経済連携協定)看護師候補者2人が、第105回看護師国試に合格。同病院に、初の受け入れから2年目にして、初の外国人看護師が誕生した。



デニス氏(写真上左)とダマスコ氏(写真下)ともに日本の看護技術を学ぶため一線で活躍中

た経験があり、わが国のさまざまな最新医療機器や看護技術を学ぶために来日したという。受け入れに当たって、同病院近くに2LDKの共用賃貸住居を用意。小野博子看護副部長が専任でEPA研修支援者に就いて、語学教育から、生活などさまざまな面をサポートしている。

入職から翌年3月までは、ともに手術室で研修し、その後、交互に半年ずつ3、4階病棟に配属。看護補助者として勤務してきた。半日就労し、残りの時間を語学等の勉強に割いた。

前回の国試では2人も不合格となり、「一度は帰国も考えた」(ダマスコ氏)というが、諦めず、4階病棟に配属。看護補助者として勤務してきた。半日就労し、残りの時間を語学等の勉強に割いた。

「仕事と学習の両面で、日本語に苦労した」(デニス氏)というように、言葉の問題が障害となり、病棟勤務時も患者とのコミュニケーションに苦しんだが、スタッフのフォローや、患者からの優しい気遣い等もあって、偏見やトラブルはほとんどなかったという。

ダマスコ氏は、循環器内科病棟に、デニス氏はICUに配属された。これまでより責任の重い業務に苦労する毎日だが、「日本で学んだ技術が、母国の大学で普及させた」(ダマスコ氏)と意欲的だ。小野看護副部長は「こ

同病院では、国際交流・貢献への寄与に加え、看護師候補者の育成支援によって、自施設のスタッフのキャリアアップや、異文化交流による視野の拡大なども期待し、2013年12月に初めてフィリピンから2人の候補者を受け入れた。

ダマスコ・ベネル・モ  
ーガン氏と、デ・ラズ  
デニス・アルフォンソ氏  
は、共にフィリピンで3  
年以上看護師として働い

た経験があり、わが国の  
さまざまな最新医療機器  
や看護技術を学ぶために  
来日したという。

受け入れに当たって、  
同病院近くに2LDKの  
共用賃貸住居を用意。小  
野博子看護副部長が専任  
でEPA研修支援者に就  
いて、語学教育から、生  
活などさまざまな面をサ  
ポートしている。

入職から翌年3月まで  
は、ともに手術室で研修  
し、その後、交互に半年  
ずつ3、4階病棟に配属  
。看護補助者として勤務  
してきた。半日就労し、残  
りの時間を語学等の勉強  
に割いた。

前回の国試では2人と  
も不合格となり、「一度  
は帰国も考えた」(ダマ  
スコ氏)というが、諦め  
ず、4階病棟に配属

。看護補助者として勤務  
してきた。半日就労し、残  
りの時間を語学等の勉強  
に割いた。

言葉の問題が障害とな  
り、病棟勤務時も患者  
とのコミュニケーション  
に苦しんだが、スタッ  
フのフォローや、患者か  
らの優しい気遣い等もあ  
って、偏見やトラブルは  
ほとんどなかったという。

ダマスコ氏は、循環器  
内科病棟に、デニス氏は  
ICUに配属された。こ  
れまでより責任の重い業  
務に苦労する毎日だが、  
「日本で学んだ技術を、  
母国の大学で普及させ  
た」(ダマスコ氏)と意  
欲的だ。

小野看護副部長は「こ  
れまでより責任の重い業  
務に苦労する毎日だが、  
「日本で学んだ技術を、  
母国の大学で普及させ  
た」(ダマスコ氏)と意  
欲的だ。

今年度は、全国で外国  
人看護師候補者は合計4  
29人(前回357人)  
が受験し、インドネシア  
人11人、フィリピン人  
22人、ベトナム人14人が  
合格している。